

アイヌ歌人・違星北斗論

——五七五七七の世界と人種主義レイシズムに抗する文学——

小野寺 真人

[Article]
ONODERA, Masato
An Essay on Hokuto Iboshi:
The World of Tanka(poem) and Counter
Literature against the Racism
(Received 30 September 2017)

A Noon of Liberal Arts, No. 8, 2018

プロブレマティク
問題の所在

二〇世紀初頭に活躍したアイヌ歌人に違星北斗がいる。後に見るように、五七五七七の世界に帝国支配下のアイヌの悲哀を詠んだ短歌には「人種主義レイシズムに抗する文学」とでも評価すべきものがある。しかし、これまでのところ、違星北斗は、歴史研究や文学研究、あるいはアイヌ研究においても、正面から考察の対象とはほとんどなっていない。その理由は主に二点挙げられよう。

第一には、現存する資料の少なさである。違星北斗自身が残した作品の集大成として、『コタン 違星北斗遺稿』があるが、一九八四年に刊行されたもので一七三ページ、一九九五年に刊行された同題のもので二一〇ページしかない。二七歳という若さで夭折したことによってもたらされるこうした情報量の少なさが、違星北

斗研究が少ないことの、一つの理由を構成していると思われる。

しかし、第二の理由は、ある意味でより深刻なものと同時代に、深く考察すべき対象でもある。それは違星北斗の文学表現の主たるものが、日本語の短歌によって構成されているという点である。違星北斗とほぼ同時代人であった知里幸恵は、アイヌ共同体に伝承されていた神謡を文字化し、左側のページにローマ字表記されたアイヌ語／右側のページに日本語を対置し、いわば対訳することによって一つの文学作品を形成した。それは、文字を持たない共同体であったアイヌにとって、なおかつ帝国日本の内国植民地政策により、急速にアイヌ語を喪失しつつあったアイヌにとって、アイヌ語を外部記憶装置カクゴ化するために必要不可欠な文学行為だったといってもよいだろう。また、例えば、後に見るようにバチエラー八重子のように、短歌で表現はするものの、時折カタカナでのアイヌ語を交えるという手法を、違星北斗はほとんど取らなかつた。つまり、

遠星北斗の文学行為は、五七五七七といういわゆる伝統的な短歌であり、しかもそのほとんどが日本語によるものだったのである。

こうした遠星北斗の日本語での文学行為に言及したのとして、小松裕とテツサ・モリス・スズキの成果が挙げられる。小松裕は「短歌という支配する側の表現形式を借りながら…(中略)…告発し、希求していたのは、異質なものの根源のないのちの平等性にほかならなかった」と評している。一方、テツサ・モリス・スズキは、「標準的日本語」で書き、短歌という「日本的」な文学形態を受容することによって、遠星はアイヌのアイデンティティについての独自のグイジョンを日本国民全体にむけて表明できると考えた。このグイジョンは、アイヌのアイデンティティを「原始的」な過去と同一視する公式的な見方を拒絶し、アイヌであると同時に「近代的」、日本人的でありうることの可能性を主張するものである」と位置づけている。^{★2}

この両者に共通することは、遠星北斗の文学行為を「日本的」なものとして位置づけている点である。では遠星北斗文学は文学のジャンル上、どういったものに分類されるのか。端的にいえば、日本文学なのか／アイヌ文学なのか／それともそれらを折衷した独自のジャンルなのか、ということにもなる。もちろん、ジャンル分けなど、商業主義や研究上のレッテル貼りの一操作にしかすぎない、と一蹴してしまふことも、可能ではある。とはいえ、遠星北斗文学をジャンル分けすることには、一定の意味内容があるように考えられる。それはすなわち、帝国日本における内国植民地の経験が、アイヌを

どのような立ち位置に陥らせたかを考える契機になるということである。そこで、参照すべきは、中川裕・志賀雪湖・奥田統己らによるアイヌ文学論である。彼らは、次のように主張する。

和人や欧米などからの影響を受けながら近代以降のアイヌが産み出しあるいは楽しむようになったさまざまな文学も、アイヌ文学の視野に入つてよいはずである。…(中略)…さらに、そのようにして近代以降アイヌによって創作された文学作品においては、アイヌ語ではなく日本語が用いられていることが少なくない。…(中略)…民族意識のシンボルとしての言語の力が大きいことはいままでもない。しかし、言語の基本的な役割は、伝統、歴史、文化そして文学などを媒介する手段にすぎないと考えることもできる。そう考えれば、アイヌ語を用いているかという観点だけで現在そして未来のアイヌ文学の視野を定めるべきではない。^{★3}

この主張を援用すれば、日本人(和人)の影響を受けた遠星北斗文学もまた、アイヌ文学の一種ということになるだろう。とはいえ、遠星北斗文学をアイヌ文学として位置づけてそれで事足りれりとするのが、本稿の志向するところではない。本稿の究極的な志向性は次の点にある。それはすなわち、小松裕とテツサ・モリス・スズキが指摘しなかつたところ、すなわち、遠星北斗が日本的なものを「受容」せざるを得なかつたことに対する考察そのものである。遠星北

斗と邂逅した伊波普猷によれば、遼星北斗はアイヌ語について次のように述べている。

私はアイヌといはれるのを嫌ひ、アイヌ語をやつるのを恥ぢたので、かんじんな母語を大方忘れて了ひました。^{★5}

このことから考えなければならないのは、遼星北斗が日本語で自己表現をせざるを得なかつたという、帝国日本内部の人種主義^{レイシズム}の抑圧のあり方である。そこで本稿では、帝国日本内部における人種主義^{レイシズム}の十九世紀からの文脈を前景化することを第一に志向する。それは、帝国日本内部におけるアイヌの立ち位置を浮き彫りにすることにたなるだろう。さらに、第二には、それに対抗する二〇世紀的な文化的抵抗の諸相を明らかにすることである。これらの二つの作業を経なければ、遼星北斗文学のアクチュアリテイ^{レイシズム}について十全に理解することは不可能である、というのが、本稿の基本的な立ち位置である。

帝國的支配の重力圏から言説で逸脱することは並大抵のことではない。言説は、言説空間の総体の中において意味内容が決定される。すなわち、言説とはそれ自体自律的でもあるが、最終的には、総体の編成の中で双方向的に自律するものだからである。つまり、アイヌであるということの意味内容を言説によって変成させようとするならば、言説によって言説空間総体にアクセスし、社会に流布した言説によるイメージを上書きしなければならない。本稿は、遼星北

斗を決して過小評価するわけではないが、不当に過大評価するわけでもない。なぜなら、そうした変成は諸言説との連関によって惹起される現象であるし、その現象を正しく理解しようとするれば、必然的に遼星北斗文学以外の言説にも目配せをしなければならないのである。そうした分析作業を経ることによって、遼星北斗文学のアクチュアリテイを歴史的にも現代社会にもサルグエージ^{レイシズム}すること。それが、本稿の基本的な問題意識と方法論を構成するものである。さて、前置きも随分と長くなりつつある。次章以下では、具体的な分析に入っていく。最初の主題は、十九世紀における帝国日本内部の人種主義^{レイシズム}のあり方を顕在化させることである。

第一章 十九世紀的世界観——福沢諭吉と加藤弘之

第一節 文明史観と人種主義^{レイシズム}

十九世紀を代表する帝国日本の総合的なイデオログとして、福沢諭吉の固有有名を挙げることは、ほとんどの読者の賛意を得ることができるだろう。福沢諭吉は自身のマニフェストともいえる『文明論之概略』で、文明について次のように述べている。

即ち野蛮は半開に進み、半開は文明に進み、その文明も今正に進歩の時なり。^{★6}

これは、当時進歩的であつた西洋文明もまた、世界史的な視野か

ら見れば進歩の途上であるものとして位置づけ、西洋文明のヘゲモニーを相対化したものとして知られる。しかし、その福沢はアイヌについては、次のように評している。

人の精神と形体と変遷を一様にするの事実も亦明白なれば、人間社会の智徳は一世にして遽に始造す可らざるや明なり。

北海道の土人の子を養て之に文を学ばしめ、時を費し財を捐て、辛苦教導するも、其成業の後に至り我慶應塾上等の教員たる可らざるや明なり。蓋し其本人に罪なし、祖先以来精神を錬磨したることなくして遺伝の智徳に乏しければなり。

福沢曰く、アイヌは遺伝的に進歩の余地はない。福沢のこのような生物学的な認識は、当時思想界に流行していた社会ダーウィニズム的な枠組みによってもたらされている。社会ダーウィニズムとは、「優勝劣敗・自然淘汰」原則によって人間社会の変動を理論的に説明するものである。それは、生物全体の法則として編成されたものであり、人間もまた生物の一種である以上、その法則から逃れることは困難を極める。社会ダーウィニズムは十九世紀から二〇世紀の社会科学を大きく規定していたし、時には優生学へと応用された理論でもある。また、社会ダーウィニズムの一潮流であるスベンサー社会学は、自由民権運動期には、国家主義の立場／自由民権運動の立場の両方に援用されたし、さらにはその後の社会主義の動輒にも大きな影響を与えている。そうした意味において、当該期に社会ダー

ウィニズムが果たした役割は、決して過小評価するわけにはいかない。では、十九世紀における社会ダーウィニズムは、アイヌをしてどのような立ち位置に至らしめるのだろうか。

そうした問題を更に前景化するために、加藤弘之の『自然界の矛盾と進化』で展開されている人種論を引用しよう。

古来大陸と余り遠隔した島嶼に住する人民は容易に開化に向ふ事が出来ずしていつまでも野蛮未開に止まつたのであるが是れは重にも外競争の機会を得ぬからである、簡様な人民でも多少内競争は免れぬけれども併し外競争は甚だ少い、それゆへ開化に向ふのには甚だ不便利である大陸に余り遠隔した島嶼に住する人民が容易に外敵の襲来に逢はないのは一寸幸福であるようであるけれども実は甚だ不幸な事である、然るに近来欧人種が世界に横行するに及びて未開人民が漸次に滅亡するやうな現象の起るのは従来曾て外邦人と接したことのなかつた未開人民が俄に開明人民と接するやうになつたゆへである、若しも従来外邦人と交通して多少生存競争に慣れて居たならば俄に簡様な悪運に陥るやうな事は免れたであらうと思はれる：（中略）：吾が北海道のアイヌの如きも亦同様の運命に陥つて居るのである。

このように加藤は社会ダーウィニズムの枠組みで、アイヌの「運命」を「漸次に滅亡」するものとして位置づける。福沢論吉的文明

史観と加藤弘之の人種論は、発展史観であると同時に、社会ダーウイニズムの因子（それ自体が発展史観の一種であることはいうまでもなからう）によって相互に結合し、十九世紀的な人種主義を規定していた。それは、帝国日本におけるアイヌの立ち位置を強く規定するものであり、すなわち、アイヌを、進歩／発展から置き去りにするものであったといわざるを得ないだろう。

第二節 十九世紀の対抗的言説

もちろん、こうした十九世紀的な人種主義に基づく日本人のアイヌ認識について、当時から反論がなかったわけではない。例えば、自由民権運動派のイデオログでもある中江兆民は次のように主張する。

嗚呼我同胞の日本人共、真に貪欲其物の狡猾其物の凝固体とも謂ふ可き者共、血盆の口を張り、鋸樹の牙を振り、水晶にて作りたる童子の如き、彼れ土人を恐嚇し、騙詐し、其命に懸けて獵獲したる熊の毛を掠め取るが如きは実に羞しきの極、汚はしきの至と謂ふ可し、開化とは晴衣を衣たる社会の謂には非ずや、野蠻とは褻衣のまゝの社会の謂には非ずや、彼れ無情無残の日本人共は、其泥に塗れたる絹服もて、彼れ土人の無垢の褻衣を汚し去りて、而して得々然たり★¹⁴

このように中江兆民は、「日本人」が「土人」を「恐嚇し、騙詐し、

其命に懸けて獵獲したる熊の毛を掠め取る」ことを「羞しきの極、汚はしきの至」と批判し、「開化とは晴衣を衣たる社会の謂には非ずや、野蠻とは褻衣のまゝの社会の謂には非ずや」と日本人によつてもたらされた「開化」と「野蠻」の区別、すなわち、文明社会のあり方にも警鐘を鳴らしている。

また中江兆民と同じく、十九世紀的な人種主義への批判を展開した久松義典の『北海道新策』も見ておこう。

土人の智識才能に関する觀察 何人も無教育にては智識才能を発達する事能はず、アイヌが其年齢さへも記憶する事無き蛮人たるを免れざるは、全く教育無きに因るなるべし、決して天然智識才能の欠乏たるにはなきなり、如何となれば土人の子弟が小学校の教育を受けて、随分発達進歩することあればなり、唯野蠻未開の俗として幼児小学校の下級にゐるのは、却て日本人より上達する速かなれども、二三年の後に至ればこゝに其進歩を止め、日本人と比肩する能はず其智識に限りあればなり、然るに中には益々進歩して□立師範学校を卒業せしものさへあり：（中略）：要するに教育の方法宜しきを得ば、数代の後ち日本人と同等の地位に達すること決して為し難き事に非ざる可し★¹⁵

ここではアイヌもまた教育を受ければ「日本人と比肩する」ことが可能になり、「教育の方法」次第では「数代の後ち日本人と同等

の地位に達する」ことが可能である、と論じられている。これは、先に見た福沢諭吉のアイヌ認識への批判として位置づけることができるだろう。しかし、その「教育」のあり得べき姿を久松義典はどのように観念しているのだろうか。

北海道の旧土人アイヌ種族は、我が帝国の臣民にして、府県人民と同じく立憲王化の徳澤に俗すべきものなり……（中略）
 ・近來アイヌ矯風会なるもの興りて旧土人を教化せんとするの企あるは最も嘉みすべし、要するに旧土人の言語及び其の生存の現状は、頗る注意すべきものあり^{★16}

久松義典のアイヌに関する叙述はとても短い。『北海道新策』全体が三三〇ページあるのに対して、アイヌに関する叙述はわずか一三ページに留まる。それでも、アイヌについて言及しているだけ、賞賛されるべきかもしれない。しかし、その叙述から垣間見られることは、アイヌも「帝国の臣民」として「教化」されるべきであるということである。ここでは「旧土人の言語及び其の生存の現状」は「頗る注意すべき」とされるだけで、多様性や多文化主義を志向した具体的な提言は皆目見当たらないのである。こうした言説では、十九世紀的な人種主義への対抗言説としては不十分である。そのことは、次の一文に最もよく顕れている。

アイヌ減耗の原因 昔時日本全州に瀰漫せし旧土人が優勝

劣敗の理数よりして年々歳々減耗しつゝあるは、前記せる旧土人数ヶ年の戸口を見ても明かなる事^{★17}

ここでは、「アイヌ減耗の原因」として「優勝劣敗の理数」が即座に結びつけられる。このように十九世紀的な人種主義の核心部分を構成する、優勝劣敗の原則に基づいた社会ダーウィニズムそれ自体を覆すことができない以上、中江兆民や久松義典が人道的な立場からいくらか批判的言説を展開しようとも、科学的言説として分厚い十九世紀的な人種主義に対する批判的言説としては不十分といわざるを得ないのである。

第二章 二〇世紀的世界観——遼星北斗と丘浅次郎

第一節 遼星北斗にとってアイヌであること

実は、遼星北斗自身も優勝劣敗原則に基づいた社会ダーウィニズム的な思考と無縁ではあり得ない。そのことを確認するために、本章では遼星北斗自身の言葉を分析することから始めてみたい。遼星北斗は次のようにいう。

けれども悲しむべし。アイヌは己が安住の社会をシャモに求めつゝ優秀な者から先をあらそうてシャモ化してしまふ。

その抜け殻が今の「アイヌ」の称を独占してゐるのだ！ 今後益々この現象が甚しくなるのではあるまいか？ 優生学的

に社会に立遅れた劣敗者がアイヌの標本として残るのではあるまいか？

昔のアイヌは強かった。然るに目前のアイヌは弱い。現代の社会及び学界では此の劣等アイヌを「原始的」だと前提して太古のアイヌを評価しようとしてゐる。けれども今のアイヌは既に古代のアイヌにさかのぼりうる梯子の用を達し得ないことを諸君と共に悲しまなければならぬ。

アイヌはシャモの優越感に圧倒されがちである。弱いからだと言つてしまへばそれまでであるが、可成り神経過敏になつてゐる。耳朶を破つて心臓に高鳴る言葉が「アイヌ」である。言語どころか「アイヌ」と書かれた文字にさへハツと驚いて見とがめるであらう。^{★18}

このように、「アイヌはシャモの優越感に圧倒されがち」、「弱いから」と、支配する側である日本人の論理が、アイヌである遼星北斗にまで貫徹しているのがよくわかるだろう。

更に遼星北斗は次のように述べる。

或晩札幌の夜学校の修業式に列席してゐますと、或る先生が演説を始める前に、私の名を呼んで、遼星君！ 私の演説中に和人に対して便宜上あなた方をアイヌといふ名称で呼ばなければならぬ場合があるが、アイヌといった方がいゝか、^マ土人^マといった方がいゝか、どちらがいゝ気持ちがあるかと、

きかれたので、実はどちらも面白くないとは思ひましたが、えゝどちらでも差支ありません、と答へましたものゝ、心中ひそかに自分にいくちのないのを恥ぢて、家に帰つた後でさめざめと泣きました。^{★19}

このように、遼星北斗は自身が呼ばれる時に「アイヌ」か「土人^マ」のどちらがよいかさえわからないと、述べている。遼星北斗にとつてみれば、どちらも侮蔑／差別意識を聴取せざるを得ない言葉なのであり、その意味においては、どのように名指されるかという次元で、すでに差別が生じているとさえいえるのである。

とはいへ、遼星北斗はそこで悲嘆して終わるものではない。

アイヌにはもと人間とかいゝ人間とか紳士とかいふ意味があるのに、何故自分はさういはれるのを嫌ふだらう、五百年間にアイヌの本義が忘れられて、侮蔑の意味に使はれてゐるとしたら、故更にアイヌと云ふ名称を避けずに、そのまゝ使ひながら、自分が偉くなり、ウタリ・クスの地位を高めて、アイヌの本来の意味を取返すやうに努力いたがいではないかと考えました。^{★20}

このようにして遼星北斗の運動は「アイヌの本義」である「いゝ人間」であることを「取返す」ことを志向する。それは「アイヌと云ふ名称を避けずに」、「自分が偉くなり、ウタリ・クスの地位を高

め」ていくことであり、遠星北斗個人による「努力」として位置づけられるのである。

——アイヌでありたくない——と云ふのではない。——シャモになりたい——と云ふでもない。然らば何か「平等を求むる心だ」、「平和を願う心だ」。……(中略)……吾アイヌ！そこに何の気遅れがあらう。奮起して叫んだこの声の底には先住民族の誇まで潜んでゐるのである。この誇をなげうつの愚を敢てしてはいかぬ。不合理なる侮蔑の社会的概念を一蹴して、民族としての純真を發揮せよ。公明正大なる大日本の国本に生きんとする白熱の至情が爆發して「吾れアイヌ也」と絶叫するのだ。

見よ、また、く星と月かけに幾千年の変遷や原始の姿が映つてゐる。山の名、川の名、村の名を静かに朗詠するときに、そこにはアイヌの声が残つた。然り、人間の誇は消えない。アイヌは亡びてなるものか、遠星北斗はアイヌだ。今こそはつきり斯く言ひ得るが……反省し瞑想し、来るべきアイヌの姿を凝視ひまのである。^{★21}

そして遠星北斗は「平等」と「平和」を志向する。その内部には、「先住民族の誇」であり、「人間の誇」が含有されている。そしてそこには、「山の名、川の名、村の名を静かに朗詠するとき」「アイヌの声が残るように、歴史的に「消えない」意志をも内包しているのである。

とはいえ、先に見たように、十九世紀的な人種主義レイシズムは根深く、強固な論理をもつてアイヌに対する帝国内部の抑圧の重力圏を構成している。そのような状況下において、対抗する言説はいかなるかたちで現出するのか。実は、意外にも、それは社会ダーウイニズムから現れるのである。

第二節 丘浅次郎の社会ダーウイニズム

その代表例として、丘浅次郎によって展開された新たな二〇世紀的社会ダーウイニズムを紹介しよう。

優った者が勝ち劣った者が敗れるのはわかりきったことで、別に説明にもおよばぬようであるが、生存競争という字も自然界の現象を論ずるに当たっては、普通に用いるよりは大きい意義を広めて無意識競争までも含ませなければならぬように、優勝劣敗というても、われわれが優者と見なす者がいつも必ず勝ち、劣者と見なす者がいつも必ず敗れるとは限らぬ。ただその場合において生存に適するものが生存するという広い意味であるから、われわれが常に劣者と見なしているものがかえって生き残るような場合があつても、これは決して優勝劣敗以外の現象ではない。^{★22}

このようにして丘浅次郎は「生存競争」に「無意識競争」という契機を付け加える。そのことの帰結は「優勝劣敗以外の現象ではな

い」のだが、注意すべきは「われわれが常に劣者と見なしているものがかえって生き残るような場合がある」り得るということである。とはいえ、丘浅次郎によれば、人種間闘争は次のように観念される。

人間の如きは最も分布の広い種属で、すでに多数の人種に分かれていることゆえ、今後はますます人種間の競争が激しくなり、適するものは生存し、適せぬものは亡び失せて、ついに僅少の人種のみが生き残って地球を占領するに違いない。この競争は今から始まるわけではない、すでに従前から行われていたことで、歴史以後に全く死に絶えた人種も幾らもあり、まさに死に絶えんとする人種もたくさんにある。^{★23}

すなわち、「適するものは生存し、適せぬものは亡び失せて、ついに僅少の人種のみが生き残って地球を占領する」という事態が招来するのである。これは「すでに従前から行われていたことで」あり、「歴史以後に全く死に絶えた人種も幾らもあり、まさに死に絶えんとする人種もたくさんにある」とされる。

こうした論理展開は十九世紀的社会ダーウイニズムのあり方とほとんど差異がないように思われるかもしれない。丘浅次郎は更に続けて、こういう。

分布の区域が広く、個体の数の多い生物種属は、必ず若干の変種に分かれ、後には互いに相戦うものであるが、人間は

今日ちようどそのありさまにあるゆえ異人種がある方法によって相戦うことは止むを得ない。しかして人種間の競争においては、進歩の遅い人種はとうてい勝つ見込みはないゆえ、いずれの人種も専ら自己の進歩・改良を図らなければならぬが、そのためにはその人種内の個人間の競争が必要である。^{★24}

丘浅次郎にすれば「異人種がある方法によって相戦うことは止むを得ない」し、「進歩の遅い人種はとうてい勝つ見込みはない」とされる。そうした人種間闘争に勝利するためには「人種内の個人間の競争が必要」になる。

ここまでの丘浅次郎の議論を見ると、人類社会は人種間闘争を基調としたものであるし、そのなかで競争による優勝劣敗という現象が起きると説明しているだけに過ぎない。しかし、丘浅次郎は「劣れる民族の損と得」において、次のような議論を展開する。

何ごとでも劣っては損に決まっているが、民族間の競争はげしい今の世では、劣った民族はすべての方面にはなはだしい損害を受けねばならぬ。交通の開けぬ時代には、文明の高い民族と、文明の低い民族とが互いに交渉なしに存在することもできたが、今日はどうていさようなことは許されぬ。汽車汽船の速力が増したただけ、地球は小さくなり、世界は狭くなって、優った民族はようしやなくどこまでもはびこるゆえ、如何なる民族といえども、彼らとの接触を避けることは

できぬ。しこうして文明の程度の異なった二民族が相触れれば、劣ったほうの民族は必ず致命的の損害をこうむるをまぬがれぬ。^{★25}

このように「民族間の競争のはげしい今の世では」、「劣った民族はすべての方面にはなほだしい損害を受け」とされる。異人種間の「接触を避けることはで」きず、「文明の程度の異なった二民族が相触れれば、劣ったほうの民族は必ず致命的の損害をこうむる」ことを免れない。

では、いかなる形で劣れる民族に得が生まれるのか。丘浅次郎は、次のような意外な論理を展開する。少々長い引用になるが、ご寛恕願いたい。

しからば劣れる民族は損ばかりであるかというに、必ずしもさようではない。もしも人間が、今上り坂にあるものならばすぐれた民族はすべての点においてすぐれ、劣った民族はすべての点において劣るはずであるが、前にも述べたとおり人間は今、下り坂の途中にあるゆえ、先へ進んだ優った民族にくらべては、後からくる劣った民族のほうが、はるか上位する点もある。例えば、服従性の退歩のごときは、劣った民族ではいまだはなだしい程度に達していないゆえ、余程ぎよしやすい。また劣れる民族は真似すべき手本を目の前に有するゆえ、或る程度までは存外速かに文明を進めることができ

る。この二点は、劣れる民族に取ってはすこぶる有利なことで、巧みにこれを用いれば、優った民族に近いところまで進んで、しかも優った民族の憂うるところを避けることができよう。

優った民族はすべて、独力で文明を進めねばならぬゆえ、その苦心は実に容易でない。一つの発明を完成するにも、多数の人間が長い時間を費やさねばならぬが、劣った民族が、そのできあがった結果を真似することは存外容易である。…(中略)：大切な秘密な点は学びがたいかも知れぬが、世間に知れ渡っただけのことはいつでも真似ができる。されば、劣った民族といえども、怠らず優った民族の真似さえしていれば、いつも彼らの一足後のところに位置を保っていられる。もとより真似のことゆえ、真にすぐれたものとはとうていできぬが、外観だけでもやや似たものができれば、それによって、優った民族と対等の位地にあるごとき体裁を装うことはあえて不可能ではない。もっともかような場合には、あたかも子供が足駄をはいて大人と背比べをすることくに、絶えず一生懸命に背延びをしておらねばならぬが、そのくらいな苦しみですむのは実に結構なことである。真似すべき手本を有することは、劣れる民族に取っては実に何よりのしあわせといわねばならぬ。^{★26}

ここに於いて丘浅次郎は「独力で文明を進め」なければならぬ「優った民族」の「苦心」を挙げつつ、「劣れる民族」がそれを「手本」

として「真似」することで、「対等の地位」に近づくことを論理的に肯定する。それには「人間は今、下り坂の途中にある」ということが理由として挙げられる。すなわち、丘浅次郎は従来の社会ダーウイズムが進化／進歩だけに力点を置いていたのに対して、退化／退歩という契機を挿入することによって、「優れた民族」の退化／退歩と、「劣れる民族」の進化／進歩を並行勵起的に証明するのである。つまり、こうした丘浅次郎のような新たな二〇世紀的社会ダーウイズムによって、十九世紀的な強者必勝・弱者必敗的な社会ダーウイズムは否定され、アイヌのような「弱者」が適者として生存する可能性が顕在化し、抑圧民族と被抑圧民族とが力能的に対等になりうるということが科学的に立証されるのであった。

第三章 違星北斗文学とその周辺

第一節 違星北斗文学の核心

それでは、本章ではいよいよ違星北斗文学そのものの分析に入りたい。違星北斗はアイヌがアイヌについて表現することについて、次のようにいう。

アイヌの研究は同族の手でやりたい、アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない強い希望に唆かされ、嬉しい東京を後にして再びコタンの人となった。今もアイヌの為に、アイヌと云ふ言葉の持つ悪い概念を一蹴しようと、『私はアイヌ

だ！』と逆宣伝的に叫びながら、淋しい元気を出して闘ひ続けて居る。^{★27}

違星北斗によれば、「アイヌの研究は同族の手でやりたい、アイヌの復興はアイヌがしなくてはならない」ものである。そして、そのことは、先にも見たように「アイヌと云ふ言葉の持つ悪い概念を一蹴」することにあるが、それは実は、アイヌの地位回復を訴求するだけにとどまるものではない。

私の歌はいつも論説の二三句を並べた様にゴツゴツしたものの許りである。叙景的なものは至って少い。一体どうした訳だらう。

公平無私とかありのまゝとかを常に主張する自分だけに、歌に現はれた所は全くアイヌの宣伝と弁明とに他ならない。それに幾多の情実もあるが、結局現代社会の欠陥が然らしめるのだ。そして住み心地よい北海道、争闘のない世界ならしめたい念願が迸り出るからである。^{★28}

違星北斗の短歌は「公平無私」によるもので、「アイヌの宣伝と弁明」を志向する。しかも、ただ単にアイヌの地位回復だけを希求するのではなく、「争闘のない世界」までも志向するのである。違星北斗が詠んだ短歌にはそのような志向性が首尾一貫して存在しているといつてよい。

次の短歌もまた、そのような一貫性に基づくものだ。

はしたないアイヌだけれど日の本に

生れ合せた幸福を知る^{★29}

哀れアイヌを亡ぼした心^{★34}

「強いもの！」それはアイヌの名であった

昔に恥ぢよ 覚めよ ウタリ^{★35}

アイヌ相手に金儲けする店だけが

大きくなってコタンさびれた^{★36}

この一首は遼星北斗文学をどのように評価し、位置づけるべきか、われわれの頭を悩ませる。しかし、遼星北斗を帝国日本支配下にある少数民族というある種の「エツジ」^{★30}に立たせている言説空間の総体からすれば、それほど不可思議に思うことではないのかもしれない。特に、一九二二年に徴兵検査で甲種合格し、翌年には旭川輜重

輸卒として軍に入隊していることからすれば、遼星北斗はある種の帝国日本的ナシヨナリズムから完全に自由であるとはいえない。

では、遼星北斗文学は、帝国日本のナシヨナリズムに完全に回収されるものだろうか。それを確認するために、矢継ぎ早に言説空間に放たれた二の矢、三の矢に目を移していこう。

滅び行くアイヌの為に起つアイヌ

遼星北斗の瞳輝く^{★32}

我はたゞアイヌであると自覚して

正しき道を踏めばよいのだ^{★33}

仕方なくあきらめるんだと云ふ心

短歌ではこのようにアイヌ問題がその主題の中心を占める。特に

「アイヌ相手に金儲けする店だけが大きくなってコタンさびれた」

の一首は、日本人（和人）資本がアイヌ共同体を浸食していることを糾弾しているといえるだろう。

しかし、遼星北斗の問題関心はアイヌと日本人（和人）だけに留まらない。次のようにもいふ箇所注目してみよう。

鮮人が鮮人で貴い。アイヌはアイヌで自覚する。シャモは

シャモで覚醒する様に、民族が各々個性に向かって伸びていく為に尊敬するならば、宇宙人類はまさに壮観を呈するであらう。嗚呼我等の理想はまだ遠きか。

シャモに隠れて姑息な安逸をむさぼるより、人類生活の正しい発展に寄与せねばならぬ、民族をあげて奮起すべき秋は来た。今こそ正々堂々「吾アイヌ也」と呼べよ。^{★37}

遼星北斗にとっては、日本が朝鮮半島を植民地支配していることも他人事ではなく、問題関心の目を向けている。ゆえに「鮮人が鮮人で貴い」のである。更にいえば「シヤモ」もまた「覚醒する」必要があるとされている。このように、民族の「各々個性に向かつて伸びていく」ことの終着点には「壯観」な「宇宙人類」の姿がある。すなわち、遼星北斗にとって、アイヌ文学とは、単にアイヌの地位回復を志向するだけのものではない。それは「人類生活の正しい発展に寄与」するものと位置づけられるのである。すなわちそれは、全人類規模における、抑圧民族と被抑圧民族の関係性総ての解放を謳った、人間讃歌そのものである。

第二節 遼星北斗文学を継ぐ者たち

さて、本章第一節に詳述した遼星北斗の文学的核心は、同世代ないしは次世代の他の文学者たちにも見出すことが可能である。たとえば、遼星北斗と同じくアイヌ文学者であるバチエラー八重子のカタカナ表記されたアイヌ語まじりの短歌を見てみよう（訳はいずれも私訳である）。^{★38}

ウタシバノ 仲良く暮さんモヨヤツカ

ネイタバクノ アウタリオピツタ ^{★39}

（今は残り少なくなったが相互に仲良く暮らしていこうではないか

我が同族の皆々）

セタコラチ イテキウコイキ イコレヤン
ピリカウカツオマレ ウエニシテヤン ^{★40}

（犬のごとく 争わずあれ 心清く 親しみ睦んで 互いに力あわせよう）

ウタシバノ ウコヤイカタヌ ピリカブリ
忘るなウタリ 永久までも ^{★41}

（互いに尊敬する 善良なる美俗を 忘るな同族 永久までも）

ふみにじられ ふみひしがれし ウタリの名
誰しかこれを 取り返すべき ^{★42}

国も名も 家畑まで うしなふも
失はざらむ 心ばかりは ^{★43}

考へて また考へて 見て見ませう
ウタリの為を ウタリの前途を ^{★44}

死人さへ 名は生きて在る ウタリの子に
誰がつけし名ぞ 亡の子とは ^{★45}

亡びゆき 一人となるも ウタリ子よ

こころ落とさで 生きて戦へ ^{★46}

このようにバチエラー八重子もまた、アイヌの地位回復と平和を詠う。バチエラー八重子の場合、カタカナでのアイヌ語も交えているため、その文学形態そのものが多様性と多文化主義を象徴しているといえるだろう。

結語——遼星北斗文学と大杉栄アナーキズム

いよいよ本稿に与えられた紙幅も尽きつつある。ここで本稿の分析の成果を纏め上げて、結語としたい。

福沢諭吉と加藤弘之によって提起された十九世紀的世界観、すなわち強者必勝・弱者必敗的な社会ダーウィニズムの言説空間にあつては、アイヌのような被抑圧民族の生存可能性は閉ざされていたといわざるを得ない。それは中江兆民や久松義典といったアイヌに寄り添おうとする論者がいたとしても、変わりのない事実であつたといえよう。

しかし、二〇世紀に入って登場した丘浅次郎の新しい社会ダーウィニズムは、そうした言説空間の編成を、一気に覆したといえる。丘浅次郎にとつての人類社会とは、あくまで競争による適者生存の世界であつたことに変わりはないが、生物としての人類は、進化／進歩するばかりではなく、部分的にはあるにせよ退化／退歩しており、そこに弱者が強者を模倣する可能性を見たのが丘浅次郎の社会ダーウィニズムの主眼である。ここにおいて、アイヌのような被

抑圧民族もまた、生存者となる可能性が顕在化したのである。そうした言説空間の変成が、遼星北斗文学の可能性の中心にあつたことを考えると、遼星北斗の志向性は単なる理想主義であるとはいえない。それは、生物の法則という科学に裏付けされた可能性の文学だつたのであり、その可能性の中には、全人類規模における平和的共存ということが明白に書き込まれていたことを、われわれは忘れてはならないだろう。

それは、バチエラー八重子いうフオロワーを得ることによって、実は広汎に謳われていた人間讃歌だつたのである。すなわち、二〇世紀における多様性と多文化主義を賞賛する十九世紀的言説への対抗的言説の登場は、アイヌだけでなく、世界中の被抑圧民族の生存可能性を後押しするものであつたと結論づけることができるだろう。そしてそれは、サイドが定義するような文化的抵抗として、^{★48} 帝国支配の矛盾を突くものであつたのである。

さて、遼星北斗文学を中心にした二〇世紀初頭の言説空間の可能性を更に浮き彫りにするために、最後に大杉栄について言及したい。大杉栄が作品を発表した時期は、帝国日本による異民族支配が確立していた時期なので、大杉栄にとって、必然的に異民族支配の問題が主題的に視圈に入つていたとはいいがたい。それは、帝国日本による異民族支配が、完全なる既得権益と化していたということを意味しており、一重に大杉栄の落ち度として糾弾すべき事柄ではない。むしろ、大杉栄以外のイデオログにとつても、そうだったのだから、糾弾されるべきは同時代人総てであるといつてもよい。

しかし、ここで大杉栄に言及することには、一定程度の意義がある。大杉栄はダーウインの『種の起源』を翻訳出版し、直接の師弟関係ではないにせよ、本稿第二章で言及した社会ダーウイニスト丘浅次郎を師と仰ぎ、社会ダーウイニズムに依拠する形で相互扶助論を展開し、独自のアナキズムを提唱したことでよく知られている。だとすれば、大杉栄の主張の中に、異民族支配を糾弾し、被抑圧民族を解放しようとする志向性が含有されているとしても、実はなんら不思議ではないのである。

大杉栄は「征服の事実」で、次のような論を展開する。

これと同時に又、征服階級の所謂教育と云ふ事が行はれた。両階級の地位の不平等を維持していく為めには、もともと被征服階級の方が有らゆる点に於て劣等種族であると云ふ觀念を、是非とも被征服階級自身の心中にしかと植ゑ付けて置かねばならぬ。若し被征服階級が些かでも之れに疑惑をさしはさむやうになれば、それは社会の安寧と秩序との大なる紊亂を生ずるもとなる。そこで此の觀念を強制する為めに、諸種の政策が行はれた。所謂国民教育の起源にして且つ基礎たる組織的瞞着の諸種の手段が行われた。^{★51}

ここで大杉栄は「征服階級」が「被征服階級」を支配するために「教育」が行われたという。しかも、その内容は、「被征服階級の方が有らゆる点に於て劣等種族であると云ふ觀念」を植え付けるもの

であり、「両階級の地位の不平等を維持していく為め」に行われるという。これは、逆にいえば、福沢諭吉と加藤弘之が展開した十九世紀的な社会ダーウイニズムを批判しつつ、中江兆民と久松義典のアイヌ擁護論をも包括的に批判し、征服と被征服の関係性を転倒させるための一大暴露に他ならない。

また、大杉栄は、歴史の複雑さを挙げつつも、そこに一貫する単純性を征服の形式にみる。

社会は進歩した。従つて征服の方法も発達した。暴力と瞞着との方法は、益々巧妙に組織立てられた。

政治！ 法律！ 宗教！ 教育！ 道德！ 軍隊！ 警察！ 裁判！ 議会！ 科学！ 哲学！ 文芸！ 其他一切の社会的諸制度！^{★52}

ここで大杉栄が挙げている総てが、階級支配の道具であると同時に、異民族支配のための装置として機能するものであることはいうまでもなからう。

では、大杉栄はこのような事態に対して、どのような形でカウンターを仕掛けるのたろうか。引き続き、「征服の事実」から引用しよう。

敏感と聡明とを誇ると共に、個人の権威の至上を叫ぶ文芸の徒よ。諸君の敏感と聡明とが、此の征服の事実と、及びそれに対する反抗とに触れざる限り、諸君の作物は遊びである、

戯れである。吾々の日常生活にまで圧迫して来る、此の事実の重きを忘れしめんとする、あきらめである。組織的瞞着の有力なる一分子である。

吾々をして徒らに恍惚たらしめる、静的美は、もはや吾々とは没交渉である。吾々は、エクスタジーと同時にアンツウジアスムを生ぜしめる、動的美に憧れたい。吾々の要求する文芸は、彼の事実に対する憎悪美と反逆美の創造的文芸である。^{★53}

このように、大杉栄にとっては、「征服の事実」への「反抗」を見せない「文芸」は「遊び」や「戯れ」、時には「あきらめ」や「組織的瞞着の有力なる一分子」でしかない。そうした「文芸」は「静的美」でしかなく、「没交渉」のものとしてしか捉えられない。そこで大杉栄が主張する文芸のあり方とは「動的美」そのものであり、征服／被征服の事実に対する「憎悪美と反逆美の創造的文芸」が賞揚されるのである。そしてそれは、本稿が主題とした遠星北斗文学を中心とした多様性^{ダイバーシティ}と多文化主義^{マルチカルチュラルイズム}を謳う文学にこそ、当て嵌まるといえよう。

もっとも、大杉栄をこのように民族問題の場に引きだすことには、異論が提出されるかもしれない。大杉栄はあくまで、階級闘争史観の人間であるという批判、これである。しかし、「征服の事実」ではこうもいっているのだ。

此の征服によつて、全く異つた二種族が、密接な接触をする事となる。しかし彼らは到底同化することが出来ない。云はば其の社会は両極に分れるのである。征服者は常に被征服者を蔑視する。有らゆる方法を以て奴隸化する。被征服者は又、仕方なしに服従しながらも、征服者の暴力以外の一切のものを認めない。斯くして互に敵視し反感する二種族が、社会の両極を形づくる事となる。

けれども此の二種族の不平等は、地位の不平等と云ふこと以上に、猶或者があつたのである。もともと此の二種族は先きにも云つた如く、全く異なる種族である。彼等は異なる言語を使つてゐる、異なる神を崇拜してゐる。異なる儀式と礼拝とを行つてゐる。異なる風俗と習慣を持つてゐる。そして被征服種族は、其等のものの一つでも失ふよりは、寧ろ退治し尽される事を望んでゐる。征服種族は其の臣下の有する有らゆるものに対して、絶対的輕侮を恣にしてゐる。

しかしそれを自らのものに同化する事は出来ない。^{★54}

大杉栄によれば「征服」は「全く異つた二種族」の「密接な接触」であり、「言語」、「神」、「儀式と礼拝」、「風俗と習慣」を異にし、「地位」は「不平等」なものとなる。この記述は、単なる階級闘争史観によるものというよりは、ありとあらゆる意味で異民族支配の事実を指摘したものとして読むべきであらう。

更に、大杉栄は「社会義と愛国心」と題した論説で、ドイツ社会

党首領ペーベルの意見を次のように紹介している。

世界主義とは、各国民間に於ける文明の平和的關係を支持し發達せしむるの意にして、国家間の威力的圧伏の謂に非ず、又国民間の暴力的結合の謂に非ず。

一国民の外に世界的文明あり。而して各国民は其倫理的及び知識的發達の比例に於て、此世界的文明に参与す。吾人の実業上の關係、科学上、美術上、文学上の活動、発見発明諸品の交換の如きは、此の世界的努力の最も顯著なる特性を有するものなり。^{★55}

ここで大杉栄は、「世界主義」を「各国民間に於ける文明の平和的關係」を「支持し發達」させるものとして積極的に定義している。そして、「一国民の外」にあるものとして「世界的文明」を想定し、その中に「実業」や「科学」だけではなく、「美術」と「文学」までもが含まれていることにわれわれは注目すべきだろう。つまり、遼星北斗文学のような多様性と多文化主義を謳う文学作品は、単なる愛国心や民族主義を超越し、つねに―すでに、世界に開かれているというわけだ。

また、フランス社会党員ギユスタヴ・エルヴエの意見はこのように紹介される。

愛国心と世界主義とは調和し得べき者なる乎。然り恰も水

の火に於るが如し。

然らば、愛国心とは何ぞや。

我故郷を愛するの謂乎。否、吾人は吾人の出生したる郷村が、たとひ明日は独領となり、露領となり、清領となることあるも、依然として一種の詩的愛隣の情を有す。

政府現在の組織を愛するの謂乎。否、若し之を以て真ありとすれば、諸政党に属する愛国者なる者は、全然無意義の者とならん。

風俗習慣、精神状態、国民的天才に執著するの謂乎。否、風俗習慣と精神状態とは、地方より地方に、都会より田舎に、階級より階級に異れり。而して佻国の農夫と独国の農夫との、風俗習慣、精神状態は、寧ろ同一国の紳士閥と農夫との夫よりも、類似する所多し。

諸国民が、交通機關の不全なるにより各割拠して生活したる時代に於ては、国民的、郡県的偏性は、甚だ盛んなりき。されど諸国民間の交通が便利となり複雑となるに従つて、国民的天才の差異も消滅す。即ち、美術、文学、殊に科学の如きは、漸次其国民的形態を失ひつつあり。^{★56}

ここでの眼目は次の点にあるだろう。すなわち、「愛国心」とは「出生したる郷村」への「一種の詩的愛隣」に過ぎないものであり、「政府現在の組織」とも無関係である。更に、「風俗習慣」と「精神状態」については、地方／都会と階級によって相違があると同時に、地域

的な共通性も存在している。そして、「美術、文学、殊に科学」は「国民的形態」を失いつつあり、それらは「世界主義」へと向かっているとされるのである。

このように、大杉栄を経由することによって、われわれは遼星北斗文学について以下のように結論づけることができる。それはすなわち、多様性と多文化主義を讃美する文学作品は、それ自体が世界主義的であるといつてよいし、同心円的な、双方向的な球体であり、多孔空間のリゾームを構成していたのである。そしてそこから漏れゆく短歌の連なりこそが社会への双方向的且つ、同時多発的、並行励起的な生成変化の基本起点となっていたことにも、われわれは読解の中心を定めるべきであろう。

もちろん、遼星北斗は世界主義者でもなければ、いわゆるアナーキストでもないし、社会主義者ですらない。しかし、当該期の言説空間の総体の中に遼星北斗文学を改めて配置してみると、むしろこれらの言説との親和性や共通性を見出すことができるのである。このことから、すなわち、次のような結論が導かれよう。遼星北斗文学は単に、被抑圧民族であるアイヌの窮状を訴え、帝国日本に意義を申し立てるだけのものではなかった。それは、世界的な意味において、被抑圧民族の苦難を告発し、世界的な連帯のための結節点の構築に成功した文学なのである。その意味においては、われわれは、戦後の三浦綾子文学など北海道文学との連続性の中で遼星北斗を説むべきかもしれない。更に踏み込んでいえば、遼星北斗とほぼ同時に展開していたプロレタリア文学との共通性をも、読み取るべき

だろう。逆にいえば、遼星北斗研究がもたらすであろう豊穣さは、そうした所に存在しているのである。とはいえ、本稿では紙幅がすでに尽きようとしている。そうした課題は次稿に回すことにして、本当に結びの言葉を述べたい。

本稿での分析を通じていえることは、次のことに集約される。すなわち、遼星北斗文学が五七五七七という狭くて深い文字の世界に、豊穣に展開されていたことを、われわれは驚嘆すべきであると同時に、いまそこそこすでに一つねに、歓待すべきということである。北斗の指し示す極星の方向へと向かって歩みを進めよう。確かに、帝国支配とそれをポトムアップする思想の連関は、分厚い暗雲をもたらししていたかもしれない。しかし、月明かりがなくとも、たまに吹く微風が、雲に切れ目をもたらず。微風はやがて渦となり、暗雲を雲散霧消させるであろう。その時に立ち現れる満天の星空、それこそが、各々個性が輝き、世界平和がもたらされる瞬間なのである。本稿は、そうした流れに対して、小さな微風を吹かせただけかもしれない。しかし、そうした微風であっても、積み重ねることによる豊穣さが、世界に光をもたらすことを確信しながら、ここには筆を措くこととしよう。

★1 いずれも草風館より出版されている。本稿で引用するものは基本的に、一九九五年版のものを用いる。後年に刊行されたものの方

が、情報量が多いからである。

- ★2 小松裕『全集 日本歴史 第一四巻 「いのち」と帝国日本』小学館、二〇〇九年、一八九頁。
- ★3 テツサモリススズギ「マイノリティと国民国家の未来」、キヤロル・クラック、姜尚中、テツサモリススズギ、比屋根照夫、岩崎奈緒子、タカシ・フジタニ、ハリー・ハルトウーニアン『日本の歴史 第二五巻 日本はどこへ行くのか』講談社、二〇〇三年、一三一頁。
- ★4 中川裕・志賀雪湖・奥田統己「アイヌ文学」、『岩波講座 日本文学史 第一七巻 口承文学二・アイヌ文学』岩波書店、一九九七年、一八五〜六頁。
- ★5 伊波普猷「目覚めつつあるアイヌ種族」、一九二五年五月一日、『伊波普猷全集』第一巻、平凡社、一九七六年、三〇六頁。
- ★6 福沢諭吉『文明論之概略』、一八七五年、慶應義塾『福沢諭吉全集』第四巻、岩波書店、一九六〇年、一八頁。
- ★7 拙稿「二つのダーウィニズム、二つのアジア観——明治一〇年代の言説空間のアボリアとエクソダス——」、『洛北史学』第九号、二〇〇七年六月、三二頁。
- ★8 福沢諭吉「遺伝之能力」、一八八二年三月二五日『時事新報』社説、前掲『福沢諭吉全集』第八巻、五八頁。
- ★9 松本三之介『利己』と他者のはざままで——近代日本における社会進化思想』以文社、二〇一七年を参照のこと。
- ★10 藤野豊『日本ファシズムと優生思想』かがわ出版、一九九八年を参照のこと。
- ★11 山下重一『スペインサーと日本近代』御茶の水書房、一九八三年を参照のこと。
- ★12 代表的なものとして、高島素之『社会主義と進化論』（売文社出版部、一九一九年）、ベンジャミン・キッド、佐野学訳『社会進化論』（而立社、一九二五年）などが挙げられる。
- ★13 加藤弘之『自然界の矛盾と進化』金港堂書籍株式会社、一九〇六年、二六三〜六頁。
- ★14 中江兆民『西海岸にての感覺』一八九一年、『中江兆民全集』岩波書店、一九八五年、四二六〜七頁。
- ★15 久松義典『北海道新策』発行者前野長発、一八九二年、八三〜四頁。
- ★16 同前、七七頁。
- ★17 同前、八二頁。
- ★18 違星北斗「アイヌの姿」（『コタン』創刊号、一九二七年）『コタン 違星北斗遺稿』草風館、一九九五年、一一三〜四頁。
- ★19 前掲伊波普猷「目覚めつつあるアイヌ種族」『伊波普猷全集』三〇六頁。
- ★20 同前、三〇六〜七頁。
- ★21 前掲違星北斗「アイヌの姿」（『コタン』創刊号、一九二七年）『コタン 違星北斗遺稿』一一四〜六頁。
- ★22 丘浅次郎『進化論講話』有精堂、一九〇四年、『丘浅次郎著作集 V 進化論講話』有精堂、一九六九年、九七頁。
- ★23 同前、三八〇頁。
- ★24 同前、三八〇〜一頁。
- ★25 丘浅次郎「劣れる民族の損と得」一九一九年、『丘浅次郎著作集 II 煩悶と自由』有精堂、一九六九年、一〇六頁。
- ★26 同前、一〇九〜一〇頁。
- ★27 違星北斗「淋しい元氣」（『エカシ・コロシ』）『コタン 違星北斗遺稿』三五頁。

- ★28 遼星北斗「私の短歌」(『北斗帖』)コタン 遼星北斗遺稿『四七頁。
- ★29 同前、四七頁。
- ★30 この「エッジ」という概念は「排除と生存に関わる人生の危機の先端的な場所を表」すものとして、栗原彬「新しい人」の政治の探求のために——水俣から学ぶこと」(キヤロル・グラック、五十嵐暁郎編『思想史としての現代日本』岩波書店、二〇一六年、三七〜八頁)から示唆を得ている。
- ★31 前掲『コタン 遼星北斗遺稿』二〇二頁。
- ★32 同前、四八頁。
- ★33 同前、四八頁。
- ★34 同前、五二頁。
- ★35 同前、五二頁。
- ★36 同前、五二頁。
- ★37 前掲遼星北斗「アイヌの姿」『コタン 遼星北斗遺稿』一一五頁。私訳するにあたり萱野茂『萱野茂のアイヌ語辞典』三省堂、一九九六年を適宜参照した。ちなみに、パチエラー八重子には次の一首もある「モシリコロ カムイバセトノ コオリバカン ウタラパビリカ ブリネグスネナ」(パチエラー八重子『若きウタリに』竹柏会、一九三一年、二頁(引用は岩波書店、二〇〇三年より))、これは金田一京助による翻訳によれば、「大八州国知ろしめす神のみことのたふとしや、神のみいづのいや高にさかえますべし」となる。もちろん、五七七七七を基調とした金田一京助の翻訳能力には驚嘆すべきものがあるが、しかし、アイヌには「国家」という概念は伝統的に存在しないし、また、「カムイ」≡神は自然が信仰の対象となるため、金田一京助の翻訳はアイヌを天皇制国家に回収しようとする誤訳というほかない。詳細は同前書
- 一一一頁に収められた村井紀による「補注」を参照のこと。
- ★39 同前、二頁。
- ★40 同前、三頁。
- ★41 同前、三頁。
- ★42 同前、五頁。
- ★43 同前、七頁。
- ★44 同前、一五頁。
- ★45 同前、二一頁。
- ★46 同前、四〇頁。
- ★47 もちろん、現在において多文化主義(マルチカルチュラリズム)という概念と実践に問題がないわけではない。しかし、天皇制国民帝国国家の異民族支配は、言語の禁止や文化・風習の禁止を基調としていたため、当時において多文化主義(マルチカルチュラリズム)は実践の余地を大いに残していたといわねばならない。現在の多文化主義(マルチカルチュラリズム)についての問題は、安達智史『リベラル・ナショナリズムと多文化主義…イギリスの社会統合とムスリム』勁草書房、二〇一三年と、『リベラル・ナショナリズム』の再検討——国際比較の観点から見た新しい秩序像(MIZERA「人文・社会科学叢書」ミネルヴァ書房、二〇一二年)に詳しい。
- ★48 サイドは『文化と帝国主義 2』(大橋洋一訳『文化と帝国主義 2』みすず書房、二〇〇一年、四五頁)において文化的抵抗を「帝国主義に対するたんなる反応」とらえるのではなく、人間の歴史を構想するオルタナティブな方法」としている。
- ★49 大杉栄全集編集委員会『大杉栄全集』第九巻、ばるる出版、二〇一五年。
- ★50 大杉栄「丘博士の生物学的的人生社会観を論ず」『中央公論』五月号、

一九一七年五月一日、前掲『大杉栄論集』第四卷、二〇一四年、五五頁。

★51 大杉栄「征服の事実」『近代思想』第一卷第九号、一九一三年六月一日、前掲『大杉栄全集』第二卷、二〇一四年、一〇六頁。

★52 同前、一〇七頁。

★53 同前、一〇八頁。

★54 同前、一〇四〜五頁。

★55 大杉栄「社会主義と愛国心」『直言』第二卷第三〇号、一九〇五年八月二七日、前掲『大杉栄全集』第一卷、二〇一五年、一〇〇〜一頁。

★56 同前、一八〜九頁。

おのでら・まさと（京都府立大学学術研究員）